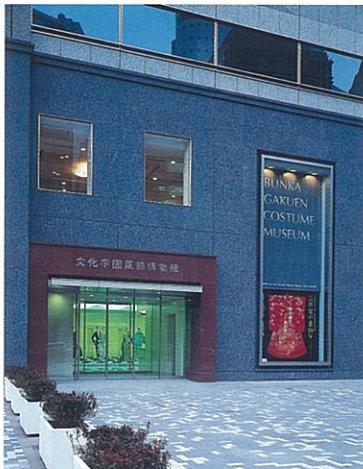


文化学園服飾博物館 だより

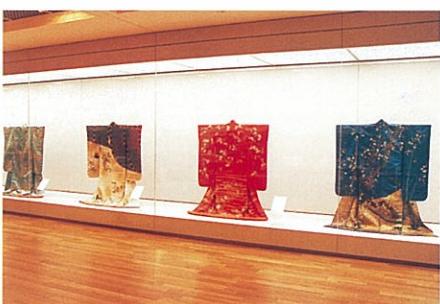
第17号 ● 2004.4.1



新博物館の外観

「宮廷衣装」展をご覧になる紀宮清子内親王殿下
左 大沼淳 服飾博物館館長・文化学園理事長
右 植木淑子 服飾博物館学芸員

「宮廷衣装」展より 女性の装束



「三井家の着物」展より 江戸後期の小袖



「ヨーロピアン・ファッショhn」展の様子



「アジアの服飾」展より 東アジア地域

● 新博物館の開館から1年 ●

甲州街道に面した新宿文化クイントビルに、新しい服飾博物館がオープンしてから一年が過ぎました。この一年は「三井家の着物」、「宮廷の装い」、「名品でたどるヨーロピアン・ファッショhn」、「守り伝える民族の心 アジアの服飾」と館蔵の名品を次々と展示いたしました。「宮廷の装い」では紀宮清子内親王殿下がご来館され皇室とゆかりの深い服飾をご鑑賞されました。

いずれの展示も資料の質が高い、保存状態がいい、丁寧に展示されているとの声が多く寄せられました。大沼淳館長(文化学園理事長)が中心になって、長い年月をかけて少しづつ資料の収集を続けてきた成果が十分あらわれていたのではないでしょうか。

しかし課題も残されました。その一つが展示室の温湿度の調整でした。開館直後は大盛況で大勢の来館者を迎えたが、展示品保護の立場から一定の温度を保つこととのバランスがむずかしいところでした。

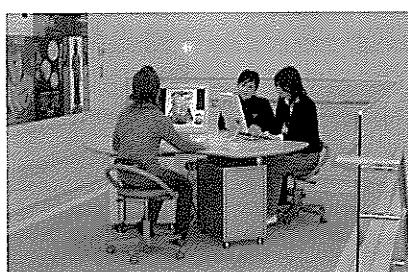
もう一つは、館内に設置された所蔵資料のデジタルアーカイブの利用に関するものです。6000点余りの資料が数多くの細部の画像を付けてデータベース化されていますが、操作が複雑すぎましたので、もう少し手軽に利用できる方法を考えています。新しい収蔵庫への引越しと併行して、資料を整理しランク付けする作業も進めました。資料の中には同種のものがたくさんあったり、一部が欠失していたり、これまで全資料のうちでまだ一度も展示していないものが多くあります。展示できるものは展示し、それ以外のものを有効利用するために、スタジルームの設置が企画されています。実際のところ、服飾の真の理解には手にとって間近で見たり、裏の構造を調べたりすることが必要で、着て動いてみないと分からない部分もたくさんあります。服飾のプロを育てるためにスタジルームの果たす役割は大きいことでしょう。

(学芸室長 道明三保子)

●新しい博物館をより理解していただくために●

服飾博物館にはさまざまな声が寄せられます。ここではよく寄せられるご質問、ご要望を、分かりやすくQ&Aでまとめてみました。

- Q. 博物館はどうして照明が暗いのでしょうか？
もっと明るければ展示品が見やすいと思います。
- A. 染織品は光による影響をたいへん受けやすい性質があります。最も分かりやすい影響の一つが褪色です。光、特に紫外線を長時間浴びると色が抜け、元には戻らなくなってしまいます。天然の染料では特に褪色、変色しやすいものがあります。そこで博物館では紫外線を含まない蛍光灯を使い、さらに照度(明るさ)を100ルクス以下に押さえることによって、展示品を保護しながら皆さんに公開しています。少しでも展示を見やすくするために、キャプションの文字の大きさや、展示品との距離などに工夫をはかっていきたいと考えています。
- Q. 常設展示は行わないのでしょうか？
- A. 常設展示として服飾の歴史の流れを見たい、というご要望も寄せられますが、上記の質問にもお答えしましたように染織品はその性質上、長い展示に耐えることができません。したがって、年に4、5回それぞれにテーマを設けた展示とし、その度ごとに展示品全てを替えていきます。
- Q. 日本の着物が見たいと思って来ましたが、外国の服飾を展示中です。何か見られる方法はないでしょうか？
- Q. 展示してあるもの以外にも服飾博物館の所蔵品をもっとたくさん見たいと思います。
- A. 服飾博物館では1年を通じて日本、ヨーロッパ、アジアの服飾を見る能够なスケジュールを組んでいます。しかし外国人の見学者などからは、着物を見たかったのに、という声も聞かれます。今後1階と2階の展示室でテーマを分ける、などの工夫をはかっていきたいと考えています。
また展示してある資料以外にも服飾博物館では多くの資料を所蔵しています。これらの所蔵品はデジタルアーカイブとして、博物館の2階ロビーで検索することができます。またホームページ上でも見ることができます。（<http://www.bunka.ac.jp>）



デジタルアーカイブ
検索コーナー

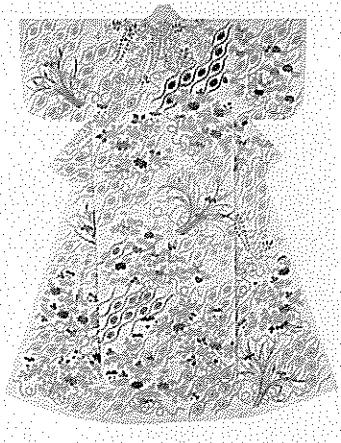
- Q. 博物館の展示品はすべて文化学園の所蔵品だと聞きましたが、どのように保管してあるのでしょうか？
- A. 収蔵品は専用の収蔵庫に桐タンス等を使って保管しています。染織品の保存にあたっては、害虫の問題や温度と湿度の管理など細かな配慮が必要となります。新しい博物館にはきめ細かに収蔵環境を調整できる収蔵庫もできましたので、今後はより安全な保管方法なども研究していきたいと思います。
- Q. 展示品についてもっと詳しく知りたいと思います。
展示の解説をしていただけないのでしょうか？
- A. 展示の期間中には、ギャラリートークが行われます。当館学芸員が展示品の解説をしながら約1時間かけて展示室を見学します。ギャラリートーク開催の日時はチラシやポスター、またホームページ上でも確認できます。その他、展示に関連する講演会などを行うこともあります。
- 「三井家の着物」講演会。「新しい和を求めて」講師：ファッションデザイナー
コシノヒロコ氏
- 「宮廷衣装」講演会。「三代の皇后」
講師：文化女子大学教授 渡辺みどり氏
- Q. 服飾博物館の展示スケジュールを知りたいのですが、展示の情報はどこで知ることができるのでしょうか？
- A. 展示の年間スケジュールは、毎年4月に発行する「文化学園服飾博物館だより」で紹介しています。文化学園ホームページ上や、電話によるお問い合わせでも確認できます。また新聞や雑誌の催し物一覧などにも情報を取り上げられることがあります。展示替え期間や不定期の休館がありますので、確認の上お出かけ下さい。
- Q. 展示の中ではいつも男性の服飾の数が少ないように思います。どうしてでしょうか？
- A. ヨーロッパでは男性の衣装は女性の衣装に比べて流行による変化が乏しい、地味であるなどの理由が考えられますが市場に出てくる量が圧倒的に少ないのです。それに比べると日本や民族衣装の部門では男性の衣装の割合は高くなっています。

● PICK UP ●

「花の表現－服飾、染織にみる花文様－」 10月15日(金)－12月10日(金)より、多岐にわたる展示品の中から、日本、アジア、ヨーロッパそれぞれの地域から4点を選び紹介します。

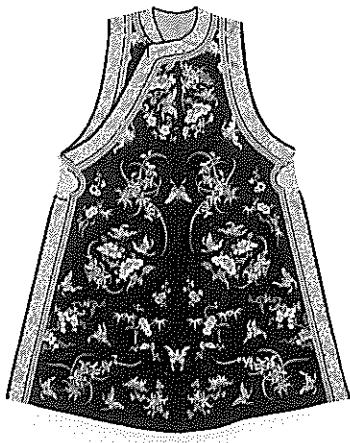
着物 絹縮地 刺繡 江戸時代後期 日本

江戸時代後期の武家女性の夏の着物で、白縮地に菊、牡丹、杜若などの花束と菊立涌が表されています。このように四季の花束と幾何学的な文様、あるいは源氏車や扇など具象的な文様を組み合せ、一領の全体に段替わりのように配置するのは武家女性の着物の典型的な意匠形式の一つです。文様には金糸や紅、紫、緑などの色糸の刺繡と型鹿の子(型染めで鹿の子絞りの文様を表す技法)が施され、華やかな印象がかもし出されています。



褂 絹繡子地 刺繡 1880年頃 中国

袖無しの褂は中国清代に女性が旗袍(チャイナドレスの原形)の上に重ねて着用したもので、宵闇を思わせる濃い藍色の地に、暈綢彩色を用いた華やかで柔らかな色調で、花とそれにたわむれる蝶を表しています。花それぞれに意味をもっており、四君子と呼ばれる梅、菊、蘭、竹は高貴さを象徴し、牡丹は富貴を、葡萄は子孫繁栄の願いを表しています。蝶はその音が70才を表す漢字と同じことから長生を寿ぐ文様とされ、全体で吉祥の文様となっています。



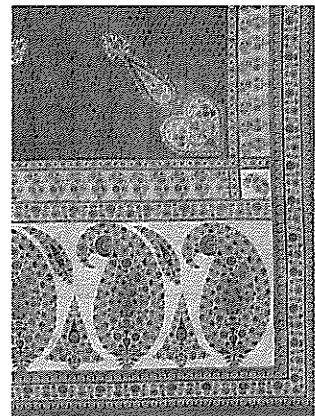
ドレス用布(部分) 絹紋織地 1760年頃 フランス

宮廷女性のドレスに用いられた裂。縦縞にバラなどの小花を編んだ花縞とレースのリボンを波状に絡ませた軽やかで華やかなデザインとなっています。ルイ15世が君臨した18世紀中頃のフランスでは、王の寵愛をうけたポンパドール夫人やデュ・バリエ夫人の影響もあり優雅で洗練された芸術様式が生まれました。王や夫人達は宮廷内の庭園や温室で花を育て愛でることを好んだことから、愛らしい小花のモチーフが衣装や室内装飾に取り入れられるようになりました。



掛布(部分) 木綿地 木版捺染 19世紀 イランか

花木を先端の曲がったしづく型にデザインした文様、ボテがさまざまなバリエーションで表され、花唐草で縁取られています。ボテはイランやインド(インドではブティ、ブタとも呼ばれる)で発展した文様ですが、日本ではペーズリーの名で一般に知られています。これは、インドで織られていたボテ文の表されたカシミア・ショールがヨーロッパでもてはやされ、それをイギリスのペーズリー市で機械を使い大量生産するようになり流行したことからこう呼ばれるようになったものです。



NHK放送大学4月からの番組に協力

放送大学の4月から始まるテレビ番組『アジアの風土と服飾文化』(15回各45分)において服飾博物館のアジア関係の資料が数多く紹介されています。主任講師は田村照子・文化女子大学教授(文化・服装学総合研究所長)と道明三保子・文化女子大学教授(文化学園服飾博物館学芸室長)です。

● '04年度 展示案内 ●

【ドレスを彩る帽子、靴、バッグ…－1800s-1960s－】

4月1日～5月29日

ファッションの歴史は衣服を中心に語られますが、服にコーディネイトされるアクセサリーも重要な役割を果たしています。時代の流れと共に移り変わるファッションは、アクセサリーが服に合わせて身に付けられることによって一つのスタイルが完成しました。本展では19-20世紀のアクセサリーの中から、装飾性に富んだ帽子、靴、バッグなどを中心に紹介します。

【友禅 伝統と創造 熊谷好博子の世界】

6月18日～8月6日

くまがいこうはくし
熊谷好博子は昭和30年代から50年代にかけて活躍した友禅の作家です。その作風は、初めは伝統的な友禅の意匠や技法を踏襲したものでしたが、直線や曲線で構成した幾何学的な文様や、自分が「天然自然の造型」と称する木の葉摺、杢目摺、石摺などを導入し、それまでの友禅には見られなかった新しい試みを展開しました。本展は長女の熊谷みづほ氏から寄贈された着物やパネル50余点を紹介します。



着物「山湖」 昭和39年



着物「光彩」 昭和46年

【西洋服飾版画の系譜－16世紀から20世紀初期まで－】

9月7日～9月28日

文化女子大学図書館開館以来50余年にわたり、収集してきた欧文貴重書の中から、16-20世紀初期にかけての西洋服飾版画の系譜をたどります。衣装やモードの伝達媒体としての服飾版画は、技法の上から、木版、銅版、木口木版、石版、ポショワールと変遷し、そして写真技術の発明と結びつきながら今日の印刷技術へと近代化されて行きます。このような変わり行く歴史の過程をオリジナル版画をとおして紹介します。

【花の表現－服飾、染織にみる花文様－】

10月15日～12月10日

世界各地の服飾や染織品に表現された花文様に焦点をあてます。花は古来具象、抽象さまざまに文様化されて、四季を表したり華やかさをもり立てたりしながら私たちの身の回りを彩ってきました。本展では花文様の表された日本、ヨーロッパ、アジア各地の衣服や装身具、ラグなどの染織品を取り上げ、地域による文様表現の違いや、染め、織り、刺繡によってそれぞれに異なった技法で表される色とりどりの花の表情を見ていきます。



女性用衣装 チェコ 1970年



着物 明治時代 久邇宮家旧蔵

【イスラム世界の服飾文化】

‘05年1月6日～3月11日

今日多くの紛争地をかかえるイスラム世界、その伝統服飾は『コーラン』の教えにもとづく宗教ときびしい風土に培われ、機能的で力強い服飾の美をそなえています。華やかな刺繡装飾の晴れ着、さまざまなヴェール、遊牧民の装身具など、西アジアを中心とする中央アジア、東南アジア、北アフリカなど広い範囲にわたり紹介します。その中でパレスチナに関するカワール・コレクション、アフガニスタンに関する松島コレクションはとくに貴重な資料です。



女性用衣装
パレスチナ南部
カワール・コレクション 1930年代



女性用衣装：トブ イエメン 20世紀前半

*上記の予定は都合により変更されることがあります。

文化学園服飾博物館だより 第17号

編集・発行 = 文化学園服飾博物館 〒151-8529 東京都渋谷区代々木3-22-7 新宿文化クイントビル TEL. 03-3299-2387
学校法人文化学園 <http://www.bunka.ac.jp> 文化女子大学／文化服装学院／文化ファッションビジネススクール／文化外国语専門学校／文化出版局／文化学園服飾博物館